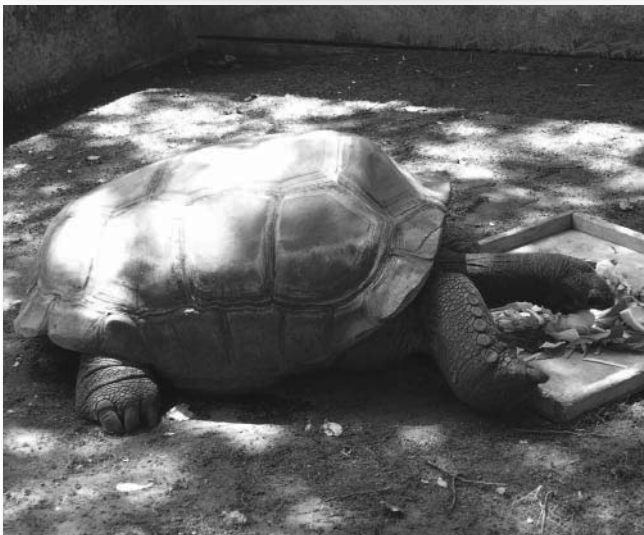




川崎いのちの電話

ひとりで悩まずに **044-733-4343**



夢見ヶ崎動物公園にて・川崎市幸区

CONTENTS

特集

「不登校は子どもが生きるために
必要なプロセスかもしれない」

NPO法人 フリースペースえん 代表 西野 博之さん

相談員リレーエッセイ 「花がつなぐもの」

電話相談送受信件数 2015年1～4月は4945件

インフォメーション

フリーダイヤル自殺予防公開講座 (7月24日開催)

こころの健康セミナー (10月10日開催)

「フォレスト」チャリティーコンサート (11月21日開催)

vol. **84**

2015. 7. 1

自死遺族ほっとライン

044-966-9951

第2・4木曜：午後1時～4時

自殺予防 いのちの電話

0120-738-556

毎月10日・24時間無料
(午前8時～翌朝8時)

社会福祉法人 川崎いのちの電話

特集

不登校は子どもが生きるために 必要なプロセスかもしれない

NPO法人 フリースペースえん 代表 西野 博之 さん

川崎市高津区に、不登校やひきこもりの子ども・若者が通う場所があります。その施設の責任者、西野博之さんは30年近く子どもや若者達に関わってきました。ありのままの自分が安心して過ごせるフリースペースを作り、2006年からは指定管理者として川崎市が開設した「川崎市子ども夢パーク」の運営にあたっています。そのフリースペースには学校や家庭・地域の中に自分の居場所を見いだせない子どもや若者たちが通ってきています。いろいろな人が一緒に生きる場所を社会に根付かせたいと活動を続けている西野さんに、これまでの取り組みや思いをお聞きしました。

二人の子どもとの出会い

不登校の子どもとの関わりを始めたきっかけは、2人の子どもとの出会いでした。

学校へ入るのを楽しみにしていた6歳の男の子が、入学して1カ月も経たないうちに、お腹が痛くなる、頭が痛くなるで、とうとう足が絡んで玄関先で倒れてしまう。行こうと思っているのに、体が思うように動かない、その時彼が訴えたのが「僕もう大人になれない」という言葉でした。みんなは、2年生、3年生、あるいは中学、高校、大学と大人になる階段を登っていくのに、自分だけ一段目の階段を踏み外してしまい、先に光や道が見えないと思ってしまったのです。

もう一人は布団をかぶって、泣いてばかりいる中2の女の子。お母さんが「いい加減にしなさい。みんなは学校に行くのに、何であんたはズルして布団から出てこないの」と言って布団をはがそうとする。だけど出てこれない。お母さんがため息交じりに「どこで子育てを失敗したのかしら」とつぶやく。それを聞いて「私って失敗作なの、母さんを困らせているダメな子、私なんて生まれてこないほうが良かったの？」と余計に布団から出ら

れなくなりました。お母さんは困り果てて夫に救いを求めるのですが、「うちの子が学校に行けないのは、お前が甘やかすからだ。全部お前のせいだ」とお母さんを責めました。それだけではなく、舅、姑も一緒になって責めました。それで、お母さんの緊張の糸がブツンと切れて「学校に行けなくなったのはみんな私のせいなんだ」「生きていくのが馬鹿馬鹿しくなった」と、娘を道連れに無理心中を図りました。

この子達とどうやって一緒に生きていくか、一緒に育っていくかということを考えながら、居場所づくりを始めました。子どもが命を絶とうとする、親が命を奪おうとする、あるいは自分の辛さを受け止めてくれない親に対して暴力を繰り返す。このような命に関わるような現場で、どのようにして“大丈夫”を伝えていくか、一緒に生きていこうというメッセージを伝えていけるかが、私の活動の出発点でした。

毎日ご飯を作って食べる。これがいい。

不登校の子どもと関わって、自己肯定感が低く、生きていていいと思えない、自分なんかだめなんだ、という自尊感情が崩れてしまっている子どもにたくさん出会いました。私が出会ったある子は、200カ所以上リスト(アーム)カットしていて、もう切るところがないというくらいに切り刻んでいる。「切るところがないから根性焼きに変えた」と言って、切り傷にタバコの火をあてて全部やけど跡に変えている。痛々しいです。そこまで自分を傷つけて、傷つけながら生きていることを実感しようとしているのです。

自己肯定感を取り戻すために、何ができるだろうかと考えました。

今の子どもは、物を買わされるだけの消費





西野博之（にしの ひろゆき）1960年、東京・浅草生まれ。1986年から不登校児童・生徒や高校を中退した若者の居場所づくりに関わる。1991年、川崎市高津区に「フリースペースたまりば」を開設。2003年7月にオープンした川崎市子ども夢パーク内に、川崎市の委託により公設民営の不登校児童・生徒の居場所「フリースペースえん」を開設、その代表を務める。2006年4月から川崎市子ども夢パークの所長に就任。精神保健福祉士。著書「居場所のちから」「7歳までのお守りBOOK」「10歳からの見守りBOOK」など。

者にされてしまっていて暮らしの主体になっていない。だから、暮らしを取り戻すというのが大事だと痛感しました。まきを割り、火をおこし、ご飯を作り、そして暮らしに関わるいろいろなこと、片づけたり、準備をしたり、何か楽しいことをしたり、当たり前の日常生活の場を作っていく。

活動を始めてから24年、全く変わってないのが、毎日昼ご飯を作ることです。みんなでご飯を作ってみんなで食べる、1日30人から40人が一緒に食べる。ご飯を作っただけで、あとは自由。寝ていることさえも否定されない、何もしないことも保障されている。それなのに子どもが元気になるのです。

「学校に行っていないのだからしっかり勉強しなさい」「みんなに追いつけるように頑張らなさい」という重圧がのしかかってくると、「自分は学校にも行けないし、何もやっていないし、ダメなんだ私」と、どんどん元気をなくしていくのです。ですから「学校に行けなくたって大丈夫だよ」「生きているだけでOKだよ」と伝えます。それも暮らしの中で当たり前でそういう空気を出していくと、スタッフも仲間も、誰も自分を責めてこないし、ダメ出しもされない。そうなると安心感が生まれ、ご飯がおいしいと思えるし、生きていてよかったと思える。こうして自分を取り戻していくのです。



ただ
誰でも通えて無料

私たちの取り組みは、1991年多摩川の川

べりの6畳・4畳半のアパートからスタートしました。毎日多摩川で遊んだ、その多摩川の名前をいただいて、不登校の子どものための居場所、「フリースペースたまりば」を開いたわけです。

最初の7年間は行政の敵といわれるくらいバッシングの嵐を受け、「学校へ行かない子どもと多摩川で泥んこになって遊んでいる場合ではない、勉強させて、早くみんなに追いつけるように学校に戻しなさい」と批判されました。

それが、90年代後半に文部省の調査で予期しない結果が出ました。“たまりば”で育った子どものほぼ9割が高校に行っていました。小学校や中学校に行っていなかった子たちが高校に行っていた、というデータが出てびっくりしたのです。教育委員会が重い腰をあげて、「もしかしたら『居場所づくり』に大きな鍵があるのかもしれない」という流れに変わったのです。

その流れの中で、子どもの活動拠点として、川崎市子ども権利条例の具現化を目指した「川崎市子ども夢パーク」作りが始まり、2003年7月にオープンしました。

「川崎市子ども夢パーク」の考え方

- ありのままの自分でいられる場
- 多様に育ち、学ぶ子どもの居場所
- 自分の責任で自由に遊ぶ場
- つくりつづけていく場
- 子どもたちが動かしていける場

川崎市が作った施設内に、不登校児童・生徒の居場所として、フリースペースをつくることになり、その運営を「フリースペースたまりば」に任されたのです。現在、公設民営の「フリースペースえん」という名称になりましたが、ここは誰でも通うことができます。年齢が高くて、社会の中に接点を作れないで

苦しんでいる人たちも一緒に交われる場所です。現在登録している人は6歳から46歳までの116人です。うち半分は何らかの障がいに関わる手帳を持っていて、診断名がついています。非行の子もいます。少年院を出たり入ったりしている子の受け入れもします。利用は無料です。

冷蔵庫があって、食器棚があって、そしてちゃぶ台があって。勉強している子もいれば、楽器を演奏している子もいる。ゲームをやっている子もいる、絵を描いたりもの作りをしている子もいれば、パソコンをやっている子もいます。相談スペースもあります。広さ1万㎡近い敷地の中の、たった120㎡の部屋ですが、ここでは、俳優やミュージシャンなどが講師を務める講座や、いろいろな活動があります。科学の先生との出会いがきっかけで、アメリカで大学の教員になった男の子もいます。その子も小学校の時から不登校でした。子どもの「あ、面白いね」「すごいじゃん」というところを伸ばしていくとどんどん伸びていきます。



不登校をネガティブに見ない

不登校というのはネガティブに見ない方がいい。長い目で見たら、その子どもが生きるために必要なプロセスなのかもしれません。言葉にならないけど、学校に行かないことで、かろうじて自分を守っているのかもしれない。起きられない体で、かろうじて心が壊れるのを防いでいるのかもしれないのです。

不登校になったらダメではないのです。不登校になって休めたということにも大きな光があるのです。学校を休めたから守れた命があるのです。むしろ休めない、休むことに罪悪感を持ち、助けてと言えない、休むことすらできない人達が、今大きな苦しさを抱えて

家庭の中で暴れていたり、自分を傷つけたりしているのです。

大事なものは、責めるのではなく、本人が一番苦しんでいるのだから、その子に寄り添いながら当たり前の暮らしをする。一気に学校に行けることに目標を設定しないで、「最近ちょっと笑顔が増えたね」「食欲が出てきたね」「一緒にテレビ見るようになったね」というような小さな変化を喜び、「大丈夫だよ」という空気を送っていきます。問題を無理やり解決しようとしなくて、問題を抱えながら生きていくことも大事かもしれないと思います。学校へ行けなくなった時の子どもは、選択肢が見えないで苦しんでいるのです。今は自分のクラスの中に居場所が見つからないだけであって、決して否定的になる必要はないということなのです。

夢パークは『発見する相談』の場

今年2月に川崎でおきた中1殺害事件で、なぜ親や周りの大人たちは、青あざを作っていた子どものSOSをキャッチしきれなかったのだろうか。私たち大人は、自分たちの周りにいる子どもの異変に本当に気づけているのだろうか、見てみないふりをしていないのだろうか。

夢パークでは『発見する相談』と呼んでいますが、たき火などをしている子ども達の様子から、「あの子お腹すかせているね」「あの子ちょっと様子変だよ」「最近アザ作っているね、誰かに殴られているのかな」と、子どもの異変に気づき、その子のSOSを発見します。年間9万3千人もの方が夢パークを利用しますが、遊び場があるということの意味は、子どもと遊びながら、子どもの異変、SOSを発見できること。これも相談のあり方の一つだと思っています。

いのちの電話やチャイルドラインでは、死んでしまいたい、殺したくなるほどの痛みや辛さを誰かが受け止めています。それは「この世界に私の声を受け止めてくれる人がいる」という究極の窓口ではないでしょうか。そこをぎりぎりの頼りとしている人にとっては、悲しみや痛みを聴いてくれる人がいたと思えた時に、やはり生きていけるのだと思います。

私たちの取り組みも、たった一人でもいい、誰かが、「どうしたの」って声をかけてくれる、受け止めてくれる、そんな大人の一人になれたらと思って続けているのです。

花がつなぐもの

花屋がなかった頃、人々は自分が育てた花の種を採り、挿し木をして増やし、友人や家族に分けたり、交換し合ったりしていた。だから、自分の庭に咲く花を見て、それを分けてくれた人を思い出し、懐かしみ、さらに手をかけて育てた。

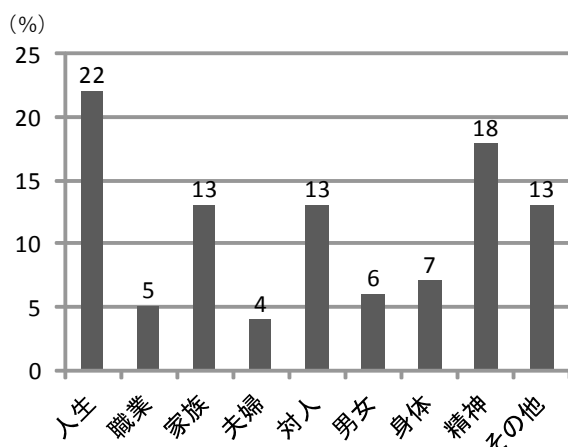
私はその話を聞いたのは、ターシャ・テューダーの庭を紹介した 2005 年放映の NHK の番組だった。彼女はアメリカで最も人気のある絵本作家の一人で、60 歳近くになって広大な敷地を手に入れ、庭づくりを始めた。番組が収録された頃、ターシャは 90 歳を越え、一人暮らしだったが、庭の手入れを自分でしていた。勢いのあるタチアオイ、アプリコット色のシャクヤク。庭に咲く花を一つひとつ紹介しながら、それと繋がる懐かしい人を思い出していた。

私の庭にも、思い出の花がある。子どもの頃、母の実家に行くと目にしたヒオウギスイセン。地味な花なのに、なぜか自分も欲しくなり、一握りの株をもら

って植えた。旺盛な繁殖力で今も増えている。ジャーマンアイリスは、亡き父が育てていたものだ。濃淡2色の紫に咲き分ける花弁は、毎年父が亡くなった5月の日を思い出させる。ほかに、晩秋に咲き出す野紺菊や、春がくるとあつという間にランナーを延ばして白い花をつけるイチゴ。それぞれの時季がくると、元気だった父が話していたことまで思い出すから不思議だ。園芸店で買った花もいいけれど、分けてもらった花には、懐かしい人につながる遠い時間が流れている。

そんな庭で、草むしりをするのは嫌いではない。無心に草取りをする。こぼれ種で生えてきた草を抜かないように注意しながら…。だから、この仕事は他の人には任せられないと、ターシャも言っていた。私もそうしながら、今は亡き人をふと思い出すのはあたたかい時間の過ごし方で、私は気に入っている。

(ジューン・ベリー)



◎2015年1～4月の電話受信状況

「川崎いのちの電話」2015年の1～4月の受信件数は4945件、このうち自殺傾向にある電話は548件で全体に占める割合は11%でした。男性が2370件、女性2575件で、比率は男性48%に対して女性は52%。

年代別では、40代が全体の23%で最も多く、次いで50代、30代、60代が10%を超えています。相談内容別＝グラフ参照＝で10%を超えたのは4分野で、生き方・死別などの「人生」が22%と最も多く、精神の病気に関する「精神」が18%、「家族」と「対人関係」が13%でした。年代別、内容別の傾向は、これまでと大きな変化はありません。

インフォメーション

川崎いのちの電話主催

フリーダイヤル自殺予防公開講座

「子どもを守るために、私たちが考えること、できること」
 講師：長谷川 俊雄・白梅学園大学子ども学部子ども学科教授
 [日時] 2015年7月24日(金) 開演 18:30
 [会場] エポックなかはら大会議室
 (JR 南武線「武蔵中原駅」改札口右へ徒歩1分)

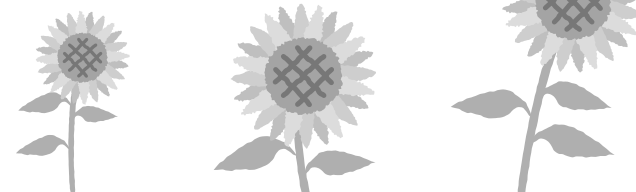
こころの健康セミナー (川崎市との共催)

第1部 お笑いコンビ「松本ハウス」&張賢徳・帝京大学溝口
 病院精神神経科教授のトークステージ。「松本ハウス」
 は2013年に統合失調症の体験記を出版した。
 第2部 ワークショップを予定
 [日時] 2015年10月10日(土) 開演 13:30
 [会場] 川崎市産業振興会館ホール(川崎市幸区堀川町66-20。
 JR川崎駅、京浜急行川崎駅から歩いて約10分)

川崎いのちの電話 「フォRESTA」チャリティーコンサート

フォRESTA (FORESTA) は、音楽大学を卒業したメンバーで
 男声、女声、ピアノで構成されるコーラスグループ。BS日テレ
 で毎週月曜日、午後9時から放映中の「BS日本 こころの歌」
 にレギュラーとして出演し、童謡・唱歌、明治から平成までの想
 い出の名曲を熱唱している。
 [日時] 2015年11月21日(土) 14:30開場 15:00開演
 [会場] エポックなかはら
 (JR 南武線「武蔵中原駅」改札口右へ徒歩1分)

[料金] 4800円(全席指定です。ご注意ください)
 [チケット購入方法] お一人6枚まで(申し込み回数4回まで)
 ① 先行電話予約 7月18日(土) 19日(日) 20日(月・祝) 3日間限定
 10:00~17:00 予約電話 044-722-7121
 ② 往復はがき 受付期間8月1日~8月15日消印有効、先着順
 住所・氏名・電話番号・チケット枚数を記入の上、下記まで。
 〒211-8690 川崎市中原郵便局私書箱17号
 川崎いのちの電話コンサート係
 ③ イープラス、ローソンチケットで購入(8月1日から発売)
 (1) e+ (イープラス)
 ・ホームページ (<http://eplus.jp/>) から申込み購入
 ・ファミリーマート端末(ファミポート) で直接購入
 (2) ローソンチケット
 ・ホームページ (<http://l-tike.com>) から申込み購入
 ・ローソン/ミニストップ端末(ロッピー) で直接購入
 (Lコード: 34240)
 満席の場合はご希望に添えないこともありますのでご了承ください。



寄付感謝報告

2015年1月~
2015年4月

川崎いのちの電話のために、温かい資金援助をいただきました。心から感謝してご報告いたします。この事業の発展にこれからもご協力ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

[個人]

(1月)	大澤 陽子	金子 圭賢	常松 恭子	村田 紀子	片山 世紀雄	(4月)	石川 俊恵
田中 幸治	匿名1名	(3月)	石原 淳子	浜崎 すみ子	近藤 八千代	豊後 秀長	近藤 八千代
松本 英彦	(2月)	松本 剛	稲川 菊代	早崎 悦子	鍋木 昌代	田中 房治	早崎 悦子
矢代 ゆう	豊後 秀長	竹内 光代	山田 美和子	上嶋 良子	瀧野 修	高橋 勉	高橋 勉
鍋木 昌代	山田 美和子	黒野 和恵	小山 稀世	安藤 義雄	山田 美和子	久保 美矢子	金子 顕
近藤 八千代	森 清	小島 良子	安藤 資次	山田 長満	高木 圭	戸張 道也	渡邊 新治
片山 世紀雄	松岡 信子	藤嶋 とみ子	石原 敏光	西田 喜久子	渡辺 恭子	市川 功一	佐藤 史朗
山田 美和子	原 勝代	小林 峯子	鈴木 敏江	五十嵐 みつこ	大石 眞理	佐藤 節男	秦 ひろみ
瀧野 修	漆原 敦子	白井 香代子	藤 真知子	布施 喜作	藤野 宏子	片山 世紀雄	
鈴木 清	深瀬 正子	河合 眞	河合 徹子	棚部 哲男	金子 圭賢	宇留野 隆雄	

[団体]

東京恩寵教会	川崎境町教会	日本基督教団川崎教会教会学校	日本基督教団新丸子教会	横浜指路教会
西明寺	藤沢ライオンズクラブ	日本基督教団元住吉教会	日本キリスト教団元住吉教会教会学校	日本基督教団向河原教会
カリタス学園同窓会	川崎御幸ライオンズクラブ	ジェクト(株)	おくせ医院	募金箱
共同購入				

[10万円以上の個人・法人及び各種団体]

川崎西ライオンズクラブ (10万円)	国際ソロプチミスト川崎 (10万円)	ライオンズクラブ国際協会 330-B 地区 (50万円)
川崎いのちの電話新ゆり製作部 (10万円)	川崎いのちの電話センター製作部 (35万円)	
合計 2,222,399円		

編集後記

2013年の文部科学省の調査では、不登校は全小中学生の1000人に1人となっています。不登校になった一番のきっかけは「友達関係をめぐる問題」でした。「いじめ」が一番ではないかと思っていたので意外でした。家族、友人、同僚、先輩、後輩、誰とであれ、人の関わりはストレスの原因です。時には引きこもりたくなりもします。そんな時、黙って聞いてくれる人がいたら、気持ちを受け止めてくれる人がいたら、きっと楽になれるのでしょう。(T)

子ども夢パークに足を踏み入れた瞬間、昭和の時代にタイムスリップしたかのような懐かしさを感じました。服を泥だらけにして駆け回ることも、そこかしこで笑い声や歓声があがり、生き生きとした空気が流れている空間。とすれば、お金で買えなかった“物”に身も心も奪われ本来の生活を見失っているご時世に、一条の光が差し込んでいるように思われました。そこには自分を取戻し、生きている喜びに満ちあふれた姿が躍っていました。(Y)